

思い出

<http://anrur.la.coccan.jp/>

切替英雄

七月下旬、小樽G C C五十周年記念会報誌に寄稿するようにと佐藤誠さん、白取英陽さんからお手紙をいただき、何も書けずに期日が迫ってきました。三年ほどG C Cに籍があったきりで、皆さんとは数えるほどしか山行をともにしたことがありません。それにもかかわらず往時を回想する機会を賜り、ありがとうございます。

とはいえ、三十五年ほど前、G C Cをかすめるか、こするかしたようなもので、わずかな断片しか思い出の中に蓄えられておりません。手稲南壁登攀、ニセコアンベツの沢、大雪山カウナイの遡行、厳冬の十勝岳、スキーとアイゼンの春の羊蹄、積丹岳のスキー登山、日高幌尻の夏山道など、どれも懐かしい山行です。しかし誤った記憶を文字に写すのではないかと恐れていますので、僕と山との馴れ初め、先妻眞智子と山西敏彦さんの思い出をごく簡単にしるすにとどめます。とはいえ、それでも「死人に口無し」という気がしなくてもありません。

湧別川河畔の町、遠軽に住んでいた昭和三十年代、小学三、四年の頃よく一人でがんばう岩に登り、また国鉄遠軽駅の裏山に登りました。がんばう岩からは、完璧に晴れてさえいれば、南に白い大雪山、北にオホーツクの海が見えました。遠軽駅の裏山から遙か遠くの手塩の山々を見るのも大好きでした。千葉の小学校では安房の清澄山に登りました。中学校では足柄山に登りました。高校二年の夏、友と二人で九州の山々を登ったことがあります。由布岳の柔らかくどっしりとした山容は今でもしっかりとした像が目に浮かびます。

既に高校のときアイヌ語を研究しようとして決めていて、昭和四十八年、千葉から札幌にやって来ま

した。山に憧れ、アイヌ語をやるには山を知らなければ、とも思っておりましたが、北大山岳部やワンダーフォーゲルに入部しなかったのは、言語学やアイヌ語、そのほかの言語の勉強の妨げになると判断したためと、それよりむしろ、組織に所属することが苦手で、入ったとしても長く続くまい、と思ったからです。また、体力からいって人に伍する自信がなかった。後年、やはりGCCに迷惑をかけることになりました。

それでも年に数回、一人で夏山に登りました。しかし一人で行った山の記憶は不思議なほど残っていません。ただ一つ覚えているのは、摩周湖の外輪山を一周しようとして挫折したことです。大学四年目の夏、摩周岳の頂上まじかにテントを張り、わずか二、三百メートルの藪こぎに「これはとても無理」と断念した翌日、その真南に臨む西別岳に登りました。これが鮮明に覚えているただ一回の山一人旅です。しかし、それからどう歩いて虹別原野を突っ切り町に降りたのか少しも思い出せない。

ところが、連れがあった山旅はよく覚えているのです。

大学三年目の空沼岳から札幌岳への縦走は、今東京の出版社に勤めている友人と二人で行った懐かしい思い出です。

大学五年目の五月、芦別岳のユーフレ沢をスノーブリッジを何度も渡りながら登ったことがあります。この山行は初め一人でやるつもりだったのです。午前三時、国鉄根室本線山部駅に降り立ちました。麓まで伸びるあの長い一直線の農道を歩いているうちに、同じ急行「からまつ」を下車した老人と若い看護婦の二人と親しくなりました。二人とも僕と同じく単独行のつもりで芦別岳を目指しておりまして。その後このお二人と会うことはありませんが、いっしょに歩いたことが楽しい記憶となって残っているのです。一日中よく晴れた日で、頂上からは小さな小さな白い羊蹄山が見

えました。北海道は島なのだ、とそのときわかりました。

この山行でもう一つ忘れられないのは、「時間が止まった」という感覚を体験したことです。登山口にいたるまっすぐな農道のわきで一人の腰の曲がった農婦が畑を耕していました。ユーフレのルートと比べるといささか退屈な尾根道を降りて、午後四時ごろ同じ農道を駅に向かってたどっていますと、やはりその老いた農婦が朝とまったく同じように畑を耕していました。日の光が東から差しているか、西から差しているかだけの違いです。美しい芦別岳は、斜めから光線を浴びると一層立体的に美しくなるのですが、今も三十年前と同じようにそびえているのでしょうか。とうとう芦別岳登攀の機会を逸した真智子は入院中「山は逃げることもある」と言っておりました。しかしそうではないのです。山は逃げず、人だけが去っていくのです。

アルピニズムが輸入されたころの近代日本の山書やウインパーの「アルプス登攀記」を読むと、麓の村落の情景、山村の風俗に多くの紙面が割かれています。また、戦前、山岳俳句を数多く作つた石橋辰之助にも「繭干すや農鳥岳に永久(とわ)の雪」という句があります。取り付き口まで乗用車で乗りつけ、いきなり山に入るのが現在では当たり前になりました。少しさびしいですね。

卒業後、文学部で一年上であった吉田真智子と暑寒別岳に登つたのも忘れられません。内陸の瀧川から増毛山地に入り浜増毛に出るとい僕にとって大変な強行軍でしたが、真智子は少しも辛そうではありませんでした。

まもなく、山西敏彦さんに率いられ「より困難を求めて」というモットーを掲げるGCCに真智子の手引きで入会し、山西さん、ミニアコンカで亡くなられた藤原さん、当時会長の川端さん、柿崎さん、村田さん、大津さんなどから道なき道のとどりかたを教わることになりました。また、町での生活と山とに折り合いをつけて生きておられる皆さんのお姿から多くのことを学びました。一昨年亡く

なられた山西さんにはこのほか強い印象を受けました。

二十八のとき眞智子と結婚しましたが、実は、大学入学以来、恋だの山だのどころではなかったのです。僕はずっと無職でした。結婚したときも無収入に近い有様でした。そしてアイヌ語の研究は言い知れぬつらいところがあつて、学生時代から何度も何度も人生のやり直しを考えました。そのたびに無謀で無茶なことに手を出しました。危い時期、一層の危険ににじり寄る傾向は僕の本性だと思えます。だけど破壊まで自分を追い込まないのも、もう一つの本性なのでしょう。結局アイヌ語はやめなかった。やがて危機を抜けてまたもとに戻るといふことを繰り返していました。おそらく今もそれが続いています。

もっとも、数々冒した無茶のどれ一つとっても自分にとつて無駄ではなかったと思つています。多くの人に迷惑をかけたのは間違ひありませんが、それを差し引けば一つも後悔していません。人は僕を目して無責任を看板にした男と思つていることでしょう。そのとおりで申し訳ないことです。しかし、人に何と言われようとGCCCという無謀な経験は僕のアイヌ語学のバックボーンとなりました。山を歩かなければ往昔のアイヌはわからないのです。アイヌ語は解けないのです。いつかお詫びをかねてその話をみなさんに聴いていただきたいと存じております。

山西さんは色々な方面に才能のある芸術家肌の岳人でした。文章、絵、カメラに秀でていました。その中でも文芸の才が際立っていました。山西さんの山の紀行文は一流の文章です。そんなことから、郵便貯金局の先輩で、登山家でもあつた版画家の一原有徳氏を師と仰いでいたに違いないと僕は考えています。一原氏の文章も見事なものでした。GCCCは積丹山塊にさまざまなルートを開き拓いたのですが、僕が読んだ氏の文章は、それをきわめて尊いことと称揚するものでした。

しかし山西さんは、音楽だけは「わがことにあらず」と思い定めていたのではないでしょう。

面白い思い出があります。浅原富士子さん、大津明さんと積丹の山のふもとにテントを張って、雨のなか一夜を明かしたとき、浅原さんがGCC創建のころの思い出を話されました。「あのころは、こうしたときよく山の歌を歌ったものよ。山西さんだって歌ったんだから」

「山西さんだって」という一言に僕たちは笑いました。

平成二十一年二月の三回忌のおり、GCCの岳友をお招きしましたが、山西さんが眞智子の最後の山行（一月のシャクナゲ岳、チセヌプリ）についてお話しくださいました。具体的に、同時に情理を尽くした見事なお話でした。眞智子の人生で山がいかに大きなものであったかしみと分かりましたし、死を予想した者の心の動きがはっきりと理解できました。眞智子の密かな心積もりでは、大学一年の冬、無意根岳で死んだ同級生を追悼するための山行だったに違いありません。それがニセコの山に変わったのは、山西さんが眞智子の技量では無理と判断されたからでした。

GCCの皆さんには末期が近づく頃、眞智子を塩谷丸山に連れて行ってくださり、また、往生を遂げた後も「逃げてしまった」芦別岳へ追悼の登山をなさいました。浅原さんからのお手紙でそれを知りました。山の仲間の篤い友情に今も胸が熱くなります。感謝に堪えません。

塩谷丸山の一月ほど前、眞智子と二人で、今度は虹別側から西別岳に登ることができました。眞智子が「道東の山に行きたい」と言ったからです。西別岳と芦別岳はこうして僕にとって忘れられない山になったのです。

六十がまじかになると、生きている人よりも死んでしまった人の方が大きな意味を持つと感じることがしばしばあります。いずれ、いつもそう感じるようになるのではないかと恐れています。しかし、GCCの皆さんには今後とも良き山行をお続けなされることを祈念しています。いつか御一緒したい。